

# 子どもを事故から守るプロジェクト ～家庭で起きる事故ヒヤリハット集の制作～

医療事務ビジネス科 2年

八島彩会里 國澤茉穂 高尾華菜子 有田瑞奈美  
田中梨織 中村美夢 船津尚誠 松村羽槻 山領涼

## 1. はじめに

厚生労働省の人口動態調査によると、1年間に発生した不慮の事故死は、約4万人。そのうち、子ども（14歳以下）の家庭内事故による死亡者数は交通事故によるものよりも上回っており、子どもの一大死亡原因となっている。特に子どもの事故については、1件の重大事故の影に膨大な事故の兆候＝「ヒヤリハット」が存在すると考えられる為、この小さな「ヒヤリハット」を見逃さず対策を行なうことが重要である。

そこで、保育園から依頼を受け、保護者支援の一つとして、家庭の中が親子ともに安心して過ごせる空間となるように事故を未然に防ぐためのヒヤリハット集を制作・導入する課題を頂いた。

## 2. 目的

- 1) 家庭内事故の調査をする。
- 2) 家庭内における事故のヒヤリハット集を制作・導入する。

## 3. 方法・結果

### 1) 家庭内事故の調査

#### ①年齢別件数と危害の程度

0,1,2歳児の中では、1歳の事故は5,220件で最も多く、全体の42%を占めている。次いで2歳が3,664件（約30%）、0歳が3,459件（約28%）と続く。また、事故の93%は軽症だが、0歳児、1歳児では、重篤・死亡事故も発生している。

#### ②事故の傾向

事故の傾向としては「転落」「転倒」「誤飲・誤嚥」が多く、子どもの発達との関係もあり、年齢によって事故の傾向にも変化がみられる。

0歳児は、1位「転落」、2位「誤飲・誤嚥」、3位「転倒」。

1歳児は、1位「転落」、2位「転倒」、3位「誤飲・誤嚥」。

2歳児は、1位「転倒」、2位「転落」、3位「ぶつかる・当たる」。

また、「さわる・接触する」は、やけどの事故がほとんどで、中等症以上になりやすい。その他、重大な事故になったケースに「挟む」による事故がみられる。

#### ③事例検討

- ・ 「転落事故」による事例

寝返りは出来ないと思って大人用ベッドに寝かせていたら転落

(2015年11月発生 4か月 女児 軽症)

- ・ 「転倒事故」による事例  
転倒しテーブルの脚に頭をぶつけ硬膜外血腫  
(2012年4月発生 11か月 女児 中等症)
- ・ 「誤飲・誤嚥事故」による事例  
ボタン電池が食道にとどまり手術で摘出  
(2012年11月発生 1歳5ヶ月 男児 中等症)
- ・ 「さわる・接触する事故」による事例  
テーブルの上の電気ポットを倒しやけど  
(2011年5月発生 1歳1か月 男児 重症)
- ・ 「挟む事故」による事例  
ハイハイしていて健康器具にぶつかり心肺停止  
(2012年8月発生 8か月 男児 重篤)

## 2) ヒヤリハット集の制作について

調査をもとに冊子に必要な項目は何か、枠組み・内容を検討する。

1. 家庭内事故の発生場所がわかる
2. 家庭内事故の主な要因・危険度がわかる
3. 家庭内事故の予防策がわかる
4. 家庭内事故後の対処法がわかる

## 4. 考察

これまでの調査資料や事例検討を研究していく中で、保育現場で起こりやすい病気や怪我、感染症についての本はたくさんあったが、家庭内事故について記載されている本は少ないことに気付けた。保育士・幼稚園教諭を目指す私達は、保育園内の環境を整えていく事は第一優先であるが、医療分野も学んできた私達だからこそ、医療機関へ受診せざるを得ない緊急を要する家庭内事故に着目することができた。

## 5. まとめ

今回のヒヤリハット集の制作にあたり、子どもは大人には予測もできないような行動をする為、どうやっても危害をゼロにすることはできないということを改めて認識した。しかし、その深刻な結果が起こるリスクを下げるところに焦点を当てた対策がこのヒヤリハット集の制作である。子育て中の保護者の不安を少しでも緩和し、この冊子が保護者支援の一助となるように、共に子育てをするという意識の高い保育士を目指して、日々励んでいきたいと思う。

## 6. 参考文献

- 「発達をみながら注意したい0・1・2歳児の事故」 独立行政法人国民生活センター  
「乳幼児の事故防止とは」 東京都福祉保健局  
「子どもの「命」の守り方」 株式会社エイデル研究所

(指導教員 森 久美子)